

# これでいいのか 循環器内科の職業被ばく に対する放射線防護

企画：片岡明久

(帝京大学医学部内科学講座 循環器)

循環器診療では診断・治療において幅広く放射線が頻用されている。とりわけ治療においてはインターベンション治療の技術が発展してきたことにより冠動脈治療のみならず、不整脈治療、下肢末梢動脈治療、そして近年開始された構造的疾患(SHD)治療まで幅広い治療手技で放射線が利用されるようになった。したがって、カテーテル術者のみならず、以前はインターベンション治療に参加していなかった心エコー医などのSHDハートチームメンバーも治療手技に加わり、新たな職業被ばくを受けるようになってきている。また、最近ではダイバーシティが進み、インターベンション治療に関わる女性医療従事者の割合が増加している情勢変化により、患者が受ける医療被ばくだけでなく、女性特有の職業被ばくにも社会的に大きな関心が集められている。

2021年に日本循環器学会の「循環器診療における放射線被ばくに関するガイドライン(班長 帝京大学 上妻謙先生)」が最新版に改訂され、職業被ばくにも重きを置かれるようになったが、コロナ禍で自宅からでも視聴できるようになった治療LIVEなどを拝見する度に、医療従事者の放射線の安全管理に最大限配慮しているとは言えない現状を目の当たりにする。また、新しい手技の開始時に海外プロクターを招聘する機会をしばしば経験するが、実際に手技に入った彼らから本邦の職業被ばく対策の不備が指摘されているのを数多く耳にする。

自らの安全を蔑ろにした本邦の苦々しい過去の歴史がメディア等で語られていることは周知のことと思うが、現代の医療現場においても患者の治療を錦の御旗にして、自己犠牲の精神で職業被ばく対策を疎かにしてはいないだろうか。令和6年、いよいよ医師の働き方改革が開始になる今こそ、就労時間のみならず、この職業被ばくの問題に対しても今一度真剣に向かいあうべき最良の機会だと考え、今回の企画に至った。循環器診療の第一線で活躍されているスペシャリストの方々に執筆いただき、示唆に富む充実した内容になった本特集が、循環器診療に携わる多くの医療従事者の職業被ばくに対する放射線防護向上の一助になることを願っている。



## HEART's Selection